W-6-2

南琉球宮古語の疑問・不定表現におけるアクセントの交替*

セリック・ケナン（国立国語研究所）

kcelik@ninjal.ac.jp

1. はじめに

日本語における疑問・不定表現については不定語のアクセントが交替するなど特殊な韻律的現象が観察されると報告されてきた（早田 1985、久保 1989、佐藤 2016 など）。しかし、これに対して琉球諸語においても同様の現象があるかどうかに関する報告がない。この状況を鑑みて、本発表ではアクセントの対立を持つ南琉球宮古語の 3 つの方言（多良間仲筋（たらまなかすじ）、下地皆愛（しもじみなあい）、下地与那覇（しもじよなは））を取り上げ、疑問・不定表現を対象とした調査の結果を報告する。

調査の結果、多良間方言と皆愛方言においては不定語（「誰」「何」など）のアクセント型の交替が観察された。すなわち、多良間と皆愛方言では、直接および間接疑問文で c 型として実現する不定語は環境により a 型（多良間）、あるいは ab 型（皆愛）として実現する。多良間方言では交替の環境が広く、存在量化不定文（「誰かいる」）、全称量化不定文（「誰もいない」）、譲歩文（「誰がいてもいい」）を含んでいるが、皆愛方言の方では交替の環境がより狭く、全称量化不定文と譲歩文の一部にだけ限られる。これに対して、与那覇方言ではどの環境においても不定語のアクセント型の交替が基本的に見られない。最後に、以上の結果を踏まえて、宮古語の疑問・不定表現に観察される現象について類型論的な位置づけを提示する。

2. 宮古語諸方言のアクセント体系

宮古語の多くの方言ではアクセント型の対立がある（平山他 1967）。各方言におけるアクセント体系は異なるものの、近年の研究の成果によって宮古語の独特な特徴としてどの方言でもアクセント型を正しく記述するために音節と文節の間に位置する「韻律語」と言う韻律的な単位を導入する必要があることが分かってきた（五十嵐（2016）など）。この単位は「2 モーラ以上の語根・接語が写像される韻律的単位」のように定義されている（五十嵐 2016）。この単位を基に 2.1 と 2.2 節では多良間方言、与那覇方言、皆愛方言のアクセント体系を簡単に解説する。

2.1 多良間仲筋方言のアクセント体系

多良間仲筋方言は低音調の有無と位置と数によって対立する 4 つのアクセント型を区別している(1)[1]（松森 2010、五十嵐 2015、青井 2016a、2016b、セリック 2021a）。a 型は無指定で、どの環境においても平板型である。b 型と c 型はそれぞれ 2 番目および 1 番目の韻律語の末尾拍に低音調が指定されている。d 型は 1 番目と 2 番目の韻律語の末尾拍に低音調が指定されている。

(1)　　a 型：(ja:ma=n)(ke:) ...「八重山に...」

---

* 調査に協力してくださった渡久山春英氏、友利京子氏、垣花譲二氏に心より感謝を申し上げる。本研究は科研費 19K13174、20H01259、21H00353 の助成を受けている。

[1] 例文ではピッチの上昇および下降を [ ]、韻律語の境界を ( )、接語境界を = 、複合語境界を + の記号で示す。また、多良間と皆愛方言は発話が高く始まるのをマークしない。同様に与那覇方言は発話が低く始まるのをマークしない。

b 型：(irau=n)(ke]:) ...「伊良部に...」
c 型：(tarama=]n)(ke:) ...「多良間に...」
d 型：(ve]ma)(ta=n)([ke:) ...「ここらに...」（多良間：調査ノート）

多良間方言のアクセント体系の重要な特徴としてアクセント型の条件異音がある。具体的に、アクセント型によって指定されている低音調は条件によって指定拍の直前に起きるピッチの下降、または指定拍の直後に起きるピッチの上昇で実現する（詳細は青井（2018）、青井（2019）を参照されたい）。本発表では、第一の低音調が直前の下降によって実現するアクセント資料のみを提示する。もう一つの特徴としてアクセント型の中和現象がある。つまり、対象語が含まれる文節の構造（後続する接語の長さや数など）によって a 型と b 型、または b 型と c 型が中和することがある（青井 2016b、青井 2017）。この場合、アクセント型を完全に認定することができない。

2.2 与那覇方言と皆愛方言のアクセント体系

与那覇方言と皆愛方言のアクセント体系はそれぞれ松森（2013）とセリック（2021b）で記述されている。両方言のアクセント体系は指定される音調の実態や表層の実現が時により大きく異なっているものの、音調が指定されている位置、アクセント型の中和の在り方、長さを条件としたアクセント所属の変化（bc 型の 2 拍動詞の接続形の b 型化）、特定の語彙の所属変化（vva「君」の c 型化）など、非常に多くの共通点が見いだされる。そのため、両方言のアクセント体系の系譜が近いと推測される。

与那覇方言は 3 拍の長さを持つ高音調の位置によって対立する 3 つのアクセント型を区別している。a 型、b 型、c 型はそれぞれ 3 番目、2 番目、1 番目の韻律語の末尾境界から 3 拍目に高音調が指定されている(2)。

(2) a 型：(ja:ma)+(ffa[=n)(ke:])=(me:du) ...「八重山出身の子にも...」
b 型：(mja:ku)+([ffa=n])(ke:)=(me:du) ...「宮古出身の子にも...」
c 型：([tarama])+(ffa=n)(ke:)=(me:du) ...「多良間出身の子にも...」（与那覇：調査ノート）

皆愛方言は下げ核（H*L）の有無と位置によって対立する 3 つのアクセント型を区別している。a 型は無指定であるのに対し、b 型と c 型はそれぞれ 2 番目と 1 番目の韻律語の末尾境界から 3 拍目に下げ核が指定されている(3)[2]。a 型は無指定のアクセント型として分析されているが、下げ核と同じ実現をする音調が付与される場合がある。つまり、文節が無核である場合、接語によって形成される最初の韻律語に下げ核と同じ実現をする音調が付与される(4)[3]。

(3) a 型：(ja:ma)+(ffa=nu) ...「八重山出身の子の...」

[2] ただし、1 番目の韻律語が 3 拍の場合、c 型の下げ核が 1 拍右へとずれる。
[3] セリック（2021b:247-248）では、a 型を有指定のアクセント型として解釈することも可能であることを述べている。その場合、「a 型は最初の接語によって形成される韻律語の末尾境界から 3 拍目に下げ核が指定される」と記述する必要がある。無指定と有指定のどの解釈がより説明力が高いかはまだ判断できないことも付け加えている。どの解釈を採用しても本発表の議論には影響しない。

b 型：(mjaːku)+(f]fa=nu) ...「宮古出身の子の...」

c 型：(tara]ma)+(ffa=nu) ...「多良間出身の子の...」（皆愛：調査ノート）

(4) a. (jaːma=n])(kai)=(mai) ...「八重山にも...」

b. (jaːma)+(ffa=n])(kai)=(mai) ...「八重山出身の子にも...」（皆愛：調査ノート）

さらに、与那覇方言と皆愛方言のアクセント体系は名詞に関わる、広範囲に渡る中和現象という特徴を共有している。すなわち、単純名詞の環境（単純名詞に如何なる接語が付いた環境）では、a 型と b 型が完全に中和するという強力な傾向が認められる。皆愛方言については a 型と b 型が区別される単純名詞の環境は 1 つも見つかっていない。与那覇方言も同様の状況が報告されている（松森 2013）が、発表者の調査ノートでは、単純名詞の特定の環境では a 型と b 型が区別されている傾向があるようなデータも得られている。いずれにせよ、両方言において a 型か b 型かを認定するに当たって、対象語を前部要素とした生産的な複合語の音調を大量に調べるなど、非常に複雑な調査法を取る必要がある。しかし、本調査の対象となる疑問詞・不定語にはこのような調査法を適用することが困難である。そのため、3 節で報告する調査結果には、a 型と b 型を区別せず、ab 型とだけ提示する。

3. 調査

3.1 調査内容とデータ

本調査では、基礎的な疑問詞・不定語のアクセントを疑問・不定表現の 5 つの文タイプの環境で調べた。対象語は分析的な表現である、または分析的な表現に遡る疑問詞・不定語を外し、「誰」、「何」、「どれ」、「どこ」、「幾つ」、「いつ」の 6 語に限定した（表 1）。「誰」、「何」、「どれ」、「どこ」は複数形も存在するが、これらの形式を網羅的に調査できなかったため、ここでは取り上げない（主格・属格専用の taː「誰」についても同様）。

表 1 対象語

方言	「誰」	「何」	「どれ」	「どこ」	「幾つ」	「いつ」
多良間	tau	nuː	ndi	nda	ifutsɿ	itsɿ
皆愛	toː	noː	ndʑi	ndza	ifutsɿ	itsɿ
与那覇	toː	noː	ndʑi	ndza	ifutsɿ	itsɿ

対象とした 5 つの文タイプとその例を(5)に示す。対象語と文タイプの各組み合わせに対して、可能な限り多くの種類の格助詞を調べた。つまり、適切な述語などを選んで、コピュラ文「誰なの？」と、主格「誰がいるの？」、属格「誰の話？」、対格「誰を見た？」、斜格「誰にあげた？」、方向格「誰に言ったの？」、奪格「誰から取ったの？」の格標識を含む枠文を調査した。ただし、対象語の意味によって特定の格を含む枠文が得られなかった場合もあった。

(5) 対象文タイプ **A.** 直接疑問文 「誰が来た？」

B. 間接疑問文 「誰が来たか分からない」

C. 存在量化不定文 「誰か来た」

D. 全称量化不定文　　「誰も来ない」
E. 譲歩文：　　「誰が来ても結構だ」

話者情報は多良間（昭和 11 年生・男性)、皆愛（昭和 24 年生・女性)、与那覇（昭和 24 年生・女性）である。調査は電話またはオンラインで実施した。調査の際、エリシテーション法を取り、発表者がインフォーマントに標準語を提示し、対象の方言で翻訳してもらった。重複を含め全部で 764 点のアクセント資料（多良間：310 点、皆愛：221 点、与那覇：233 点）が得られた。

3.2 結果

表 2 多良間方言に関する調査結果

文タイプ	「誰」	「何」	「どれ」	「どこ」	「幾つ」	「何時」
A. 直接疑問	c	c	c	c	c	a
B. 間接疑問	c	c	c	c	c	c
C. 存在量化	a	a	a	a	NR	c
D. 全称量化	a	a	a	a	a ~ b	a
E. 譲歩	a	a	a (~ c)	a (~ c)	a ~ c	a

表 3 皆愛方言に関する調査結果

文タイプ	「誰」	「何」	「どれ」	「どこ」	「幾つ」	「何時」
A. 直接疑問	c	c	c	c	ab	ab
B. 間接疑問	c	c	c	c	ab	ab
C. 存在量化	変調	変調	変調	変調	ab	変調
D. 全称量化	ab	ab	ab	ab	ab	ab
E. 譲歩	c ~ ab	c ~ ab	c ~ ab	c ~ ab	ab	ab

表 4 与那覇方言に関する調査結果

文タイプ	「誰」	「何」	「どれ」	「どこ」	「幾つ」	「何時」
A. 直接疑問	c	c	c	c	ab	ab
B. 間接疑問	c	c	ND	c	ab	ab
C. 存在量化	c	c	ND	c	ab	ab
D. 全称量化	c	c	ND	c ~ ab	ab	ab
E. 譲歩	c	c	ND	c ~ ab	ab	ab

まず、どの方言の疑問詞体系もアクセント型の対立が認められる。それのみならず、「幾つ」（部分的に「いつ」）を除いて各疑問詞が所属するアクセント型が方言間で対応している。すなわち **A.**の環境において「誰」「何」「どれ」「どこ」は c 型に分類されるのに対して、「いつ」は a 型（多良間）または ab 型（皆愛、与那覇）に分類される。同環境で「幾つ」は多良間方言では c 型であるが、与那覇と皆愛方

言では ab 型である[4]。**B.** の環境は基本的に **A.**と同じであるが、なぜか多良間方言において itsɿ「いつ」が c 型として実現する（**C.**も同様）。

次に、他の環境（**C.**、**D.**、**E.**）を見ると、方言ごとに異なるパターンが観察される。最も整然とした体系を示しているのは与那覇方言である。すなわち、この方言では環境を問わず、疑問詞・不定語が一貫したアクセント型で実現している。ただし、唯一、ndza「どこ」は **D.**および **E.**の環境において方向格 =nkeː と共起する際、ab 型への交替が見られる(6)[5]。

(6)　c 型：(n[dzaː=n])=(meː=du) ...「どこにも（ある）」
　　ab 型：(ndza=n)(keː)([meː=du]) ...「どこにも（行ってきた）」（与那覇）

これに対して、多良間方言と皆愛方言では環境によるアクセント型の交替が広く観察される。多良間方言では、**A.**と **B.**の環境で c 型で実現する語は他の環境ではほとんど a 型で実現している。「誰」と「何」については例外がない。しかし、「どれ」と「どこ」は **C.**、**D.**、**E.**のほとんどの環境で a 型で実現しているものの、属格の枠文では c 型のままである(7)。また、「幾つ」はやや複雑な振舞をしており、共起する接語によってアクセント型が変わる。副詞的な用法では a 型、項としての用法では b 型ないし c 型になる傾向があるようである(8)。

(7)　a 型：(nda) (ara]ba)=(mai) ...「どこでも（結構だ）」
　　a 型：(nda=n)(keː) (ikaba)=(mai) ...「どこに行っても（結構だ）」
　　c 型：(nda]nu) (panasɿ=u) (ɕuba)=(mai) ...「どこの話をしても（結構だ）」（多良間）
(8)　a 型：(ifutsɿ) (kaːba)=(mai) ...「幾つ買っても（結構だ）」
　　c 型：(ifutsɿ=]n)(keː) (bakiba[)=(mai) ...「幾つに分けても（結構だ）」（多良間）

皆愛方言は多良間方言と似ている側面も異なる側面もある。**A.**および **B.**の環境で c 型で実現している語は **D.**の環境において一貫して ab 型で実現している。しかし、**E.**の環境では枠文によって ab 型への交替（方向格、奪格）もあれば、c 型のままでの実現（コピュラ文、対格、属格）もある(9)。なお、**D.**と **E.**の環境では 2 音節 2 拍の語は語末の母音が長音化する（ndza > ndzaː、itsɿ > itsɿː など）という現象も観察された。これに対して、**C.**の環境で現れる音調パターンは既存のアクセント型で解釈できないようである(10)。つまり、文節内では 2 つの下降が実現しており、どのアクセント型のパターンとも一致しない。現時点ではこのパターンをどのように分析するべきかは分からない。

---

[4] 多良間方言に系統的に最も近い水納島方言は多良間方言と同じである。つまり、直接疑問文では toː「誰」、nuː「何」、ndi「どれ」、nda「どこ」、ifutsʉ「幾つ」は c 型であるのに対して、itsʉ「いつ」は a 型である（調査ノート、昭和 14 年生・男性）。ローレンス（2008）では宮古語と八重山語の比較に基づいて南琉球祖語において「幾つ」の a 型化という改新が起きていると述べている。多良間方言では二次的な変化として「幾つ」がさらに c 型化したという（ローレンス 2008：注 20）。ローレンス（2008）が想定している改新が正しければ、皆愛方言と与那覇方言の方が宮古語祖語ないし南琉球祖語の本来のアクセント型を保持しているということになる。なお、多良間方言では d 型の疑問詞もある（i]dakiː[「どのぐらい高い」など）。

[5] より詳しく言うと、交替のパターンでは高音調が 3 番目の韻律語に付与されている。これは与那覇方言の単純名詞における a 型の本来の音調であると考えられるため、a 型への交替であることが示唆されている。

(9)　ab 型：(to:=n])(kai) ([fi:rja:])=(ma[i)[6] ...「誰にあげても（結構だ）」
　　c 型：(to:]=ga) (panas=su) ([ɛi:rja:])=(ma[i) ...「誰の話をしても（結構だ）」（皆愛）
(10)　？型：(ndza]=ga)(ra[:]nudu) ...「どこかが...」
　　？型：(ndʑi]=ga)(ra[:]nu[du) ...「どれかが...」（皆愛）

4. 考察

3 節では宮古語の 3 つの方言における疑問・不定表現の韻律的特徴について報告した。本節では、佐藤（2019）および佐藤（2021）によって提案されている枠組みを参照して対象の 3 つの方言がどのように位置づけられるかを見てみる。

佐藤の枠組みでは、通方言的に見られる、疑問・不定表現における韻律的現象を分類するにあたって、「疑問詞においてアクセントの対立があるかどうか」、「不定表現において平坦化が起こるかどうか」、「平坦化の及ぶ範囲は文節以下なのか、文節以上なのか」の 3 つの変数を導入している。本発表での対象方言はまず第一に疑問詞においてアクセントの対立が認められる。第二に、与那覇方言は不定表現においてアクセント型の交替が見られないのに対して、多良間と皆愛方言はアクセント型の交替が見られる。そして、交替の在り方を見ると、ピッチの変動があるアクセント型（c 型）から、ピッチの変動がない（多良間の a 型）、あるいはピッチの変動がよりない（皆愛の ab 型）アクセント型に替わっていることが分かる。つまり、多良間方言と皆愛方言で観察されるアクセント型の交替は佐藤の枠組みでいう「平坦化」と一致していることが言える。さらに、多良間方言での交替範囲は皆愛方言に比べ広いが、それを含んでいることも指摘できる。第三に、多良間方言と皆愛方言における「平坦化」の現象は文節レベル（これらの方言では語レベルと同じ）で起きている。

参考文献：青井隼人（2016a）「南琉球宮古語多良間方言の音声学的・音韻論的構造の諸相」博士論文, 東京外国語大学／青井隼人 (2016b)「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント—その特徴と型の中和—」『音声研究』20 (3): 66–80／青井隼人 (2017) 「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』13:1–23／青井隼人 (2018)「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇: 複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」『国立国語研究所論集』14: 1–27／青井隼人 (2019)「南琉球宮古多良間方言の欠性的低音調」『音韻研究』22: 3–10／五十嵐陽介 (2015)「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8:1–42／五十嵐陽介 (2016)「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33-57／久保智之 (1989) 「福岡市方言のダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』156: 1-12／佐藤久美子 (2016)「長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則」日本言語学会 153 回大会, 12 月 4 日, 福岡大学／佐藤久美子 (2019)「不定語のアクセントと不定語を含む文のイントネーション－東京・福岡・鹿児島・長崎の対照－」Prosody & Grammar Festa3, 2 月 17 日, 国立国語研究所／佐藤久美子（2021）「日琉諸語の疑問・不定表現における韻律的現象の類型化の提案」日本言語学会第 163 回大会／セリック・ケナン（2021a）「南琉球宮古多良間方言は四型であって、三型ではない」NINJAL サロン第 217 回（オンライン開催） 2021 年 1 月 21 日配布資料／セリック・ケナン（2021b）「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」『言語記述論集』13: 215-290／早田輝洋 (1985)『博多方言のアクセント・形態論』福岡：九州大学出版会／平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院／松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道(監)『日本語研究の 12 章』490–503. 東京：明治書院／松森晶子（2013）「宮古島における 3 型アクセント体系の発見: 与那覇方言の場合」『国立国語研究所論集』6: 67–92／ローレンス・ウエイン（2008）「与那国方言の系統的位置」『琉球の方言』32: 59–67.

[6] 皆愛方言ではイントネーションによって文節の末尾拍に高音調が付与されることがよくある。この高音調はアクセント型によって指定される音調とは無関係である。以下の例も同様。